

現代社会におけるテレビの役割とその変容

—若者のテレビ視聴の変化—

遠藤柚稀

本研究は、インターネットおよびスマートデバイスの急激な普及によってメディア環境が大きく変化する現代社会において、テレビが果たしてきた役割とその変容について明らかにすることを目的とする。特に、若者世代のテレビ視聴行動の変化に着目し、「テレビ離れ」と言われる現象の実態と背景、さらに今後のテレビの可能性について考察を行った。

かつてテレビは、家庭の中心に位置し、家族全員が同じ時間に同じ番組を視聴することで共通体験を生み出す「家族団らん装置」として機能してきた。また、ニュースや娯楽、教育などを通して、社会全体に共通の話題や価値観を提供する「国民的メディア」としての役割も担っていた。

しかし、2000年代以降のインターネットの普及や、スマートフォンをはじめとするスマートデバイスの登場により、人々の情報収集や娯楽の在り方は大きく変化している。

本研究ではまず、テレビの誕生からデジタル放送時代に至るまでの歴史を整理し、テレビが社会や家庭の中で果たしてきた役割を明らかにした。次に、インターネットやVOD (Video On Demand) サービスの普及によって、テレビの視聴形態が「同時性」から「選択性」へと移行している点に注目した。YouTube や Netflix、TVer といったサービスの台頭により、若者は放送時間に縛られることなく、自身の興味関心や生活リズムに合わせてコンテンツを選択するようになっている。

さらに、若者を対象としたアンケート調査を通してテレビ視聴の現状を分析した結果、テレビ視聴時間の減少は確認されたものの、テレビが完全に不要なメディアになったわけではないことが明らかとなった。特に、災害時の情報源としての役割や、家族と共に視聴する場面においては、現在も重要な役割を果たしていることが示された。

以上の考察から、テレビは従来のある在り方を変化させながらも、SNS や動画配信サービスと連携することで、新たな可能性を持つメディアへと移行していると言える。本研究は、若者の視点からテレビの現状を捉え直すことで、今後のテレビ番組制作やメディア活用の在り方を考える上での一つの手がかりとなることを示した。

また本研究では、「テレビ離れ」を一方的な衰退として捉えるのではなく、若者のメディア選択の多様化という視点から再検討した点に特徴がある。若者はテレビを「見なくなった」のではなく、目的や状況に応じてメディアを使い分けていることが明らかとなった。こうした視点は、従来のテレビ観を見直すきっかけになると考えられる。

以上より、テレビは他メディアと競合する存在ではなく、連携・共存することで新たな価値を生み出す可能性を持つメディアであることが示唆された。